



天文資料

2020年11月号

令和2年度 第8号 (11月号)

令和2年10月28日

発行：佐世保市少年科学館

佐世保市少年科学館



<秋の夜空で赤い輝きを放つ火星が少しずつ遠ざかっています。>

10月6日に地球に最接近した火星が少しずつ遠ざかっています。とはいえ、11月下旬までは土星の本星並みの大きさがあり、明るさも恒星の中で一番明るいシリウス(おおいて座)並みですので、秋の夜空ではとても目立ちます。火星は2年2か月の間隔で地球との距離が近まり大きく見えるようになりますが、これからしば



らくは小接近が続くのでそれほど大きく見えません。大きく見えるようになるのはこれから13年後の2033年6月から7月にかけてです。そのときの場所はいて座になります。

今月は冬の天の川をたどってみましょう。出発点は南西の低空に見える木星と土星です。この右側(西側)に天の川の中心部があるので、ここからまだ西空に見えている「夏の三大角」に目を向け、その一番高いところで輝くデネブ(はくちょう座)からそのまま北極星の上の方に目を向けていきましょう。すると、その辺りにジグザグに星が並んだカシオペア座があります。その途中にケフェウス座がありますが、明るい星がないのでせつかくのロケット型の星並びがわかりにくいのが残念です。カシオペア座の先には



国立天文台HPより

ペルセウス座の星並びがあります。Mel(メロッテ)20と呼ばれる星の集まりとその近辺の星が弓のような形に並んでいます。その先はぼんやりとした雲のようなものが…。和名「すばる」でおなじみの星団です。ここはおうし座、もう冬の星座です。

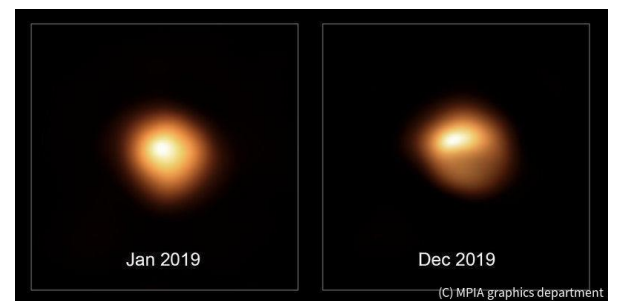
<巨大黒点かダスト放出か ベテルギウスの減光メカニズムは…>

2019年後半から2020年前半にかけて注目を集めたオリオン座ベテルギウスの大幅な減光について、世界中の研究者がその理由を追究しています。極大の40%まで光度が落ち込んだ可視光だけでなく、電波望遠鏡APEX(チリ)とJCMT(ハワイ)によるサブミリ波の観測データも20%の強度低下を示していました。

マックス・プランク天文学研究所(ドイツ)の研究者が率いるチームは、低下した平均温度は約200℃と考えました。また、ヨーロッパ南天天文台(チリ)で撮影された画像からは、減光中のベテルギウスの表面に著しく非対称の輝度分布が見て取れました。これを考え合わせると、ベテルギウスの表面積の50~70%を覆うような黒点が出現していたのかもしれませんが。一方ハーバード・スミソニアン天体物理学研究センター(アメリカ)のチームは、ベテルギウス表面から放出された高温のプラズマが数百万km外側まで移動して温度が下がったため多量のダストが生成され、恒星を覆い隠すように減光を生じたと結論付けています。

その後もベテルギウスに通常の変更周期と合わない減光が確認されていることから、今後の動向が注目されています。

(国立天文台情報センター記事から抜粋)



(C) MPIA graphics department